

論文の和文要旨

論文題目

「バサリ社会の仮面 —仮面及びその語り口の変化に関する民族誌的研究—」

氏名

山田重周

要旨

西アフリカのセネガル共和国とギニア共和国の国境地帯には、近隣民族あるいはフランス人研究者に「バサリ」と呼ばれるひとびとが居住している。

本論は、仮面を中心に展開される営みに焦点をあてることによって、バサリ社会の生活の一端を描きだすことを目的とした民族誌である。

先行研究の中で、バサリ社会の仮面は、ときに「女性や子どもたちには」という限定をつけられることはあるが、総じて「超自然的な精霊」と記述されている。

たとえば、Gessain は、1971 年、バサリ社会の年齢階梯に関する論考を行うなかで、「女性にとって仮面とは、超人間的な能力を持つ超自然的な精霊 (esprit) である」と記述している。Ferry は、1977 年、仮面の名前に関する報告を行うなかで、仮面は「女性と子どもに対しては、川や森の中からやってきた精霊 (esprit) であると言われている」と述べている。Girard は、1984 年、バサリ社会の仮面は、「冥界の精霊 (génie) の明らかな表れ」でありバサリのコスモロジーと不可分なものであると記している。また、Nolan は、1986 年に出版された著作の中で、仮面を「仮面を付けた精霊 (a masked spirit)」という語で翻訳している。最近では、2003 年に出版された著作のなかで、Gessain は、仮面を「木の葉や繊維でできた衣装の下に隠された受肉した精霊 (esprit)」と記述している。

しかし、これらの記述はあまりにも一面的かつ静態的ではないか。

確かに、バサリ社会の仮面は「精霊」とであると語られることがある。しかし、バサリ社会の仮面に関する語り口がこれ 1 つしか存在しないわけではない。また、バサリ社会の仮面は、アフリカの他の地域の仮面と同じように「精霊」であるわけではないであろう。とすれば、仮面がそうであると語られる「精霊」とはいかなるものであるのかが問われなければならないのではないだろうか。

さらに、先行研究が明らかにしてきたように、アフリカの仮面は決して固定的なものではなく、歴史的に変化してきたものであるならば、仮面に関する語り口も同様に、コスモロジーに関わる固定的かつ静態的なものとしてではなく、歴史的に産出されてきたものとして捉えることができるのではないだろうか。

このような問題意識のもと、本論では、バサリ社会の仮面に関する語り口をバサリ社会と外部社会との関係の変化という枠組みの中に位置づけることで考察した。

第 1 章では、ある特定の社会を、閉じた空間として静態的に把握するのではなく、外部との関

係を検討することで歴史的に描出することを目指してきた先行研究、バサリ社会に関する先行研究を概観し、バサリ社会の仮面を記述の対象とすることで、

- 1) バサリ社会の仮面の変化は、先行研究で問題とされてきた位相とは異なる位相で起きていること
- 2) 先行研究で提出されてきたバサリ社会の仮面像は一面的なものでしかないこと

の2点を明らかにすることができるかと述べた。さらに、

- 3) 仮面に関する言説は、ある特定社会のコスモロジーに関わる固定的かつ静態的なものではなく、ある特定のコミュニケーションによって産出される歴史的なものであると解釈すること

が可能であることを示すことができるようになるかと述べた。

第2章では本論の議論の背景となるバサリ社会の民族誌的資料を提示した。

第3章では、先行研究を参照することで、バサリの居住する地域をその一部に含むセネガンビア南部地域の歴史を概観した後、バサリ社会の歴史を記述し、現在、孤立している、あるいは「孤立している」と語られているバサリ社会は、もともとから孤立していたわけではなく、ひとびとの交流・接触の結果、現在見られるようなかたちで存在することになったのではないかと結論した。

第4章では、バサリ社会の出自集団と年齢階梯に関する民族誌的資料を提示し、これら2つの制度がそれぞれどのようにひとびとを結び付けているのか、またこれら2つの制度が変化する中でひとびとの結びつきがどのように変化しているのかを検討した。本章の記述を行うことによって、現在バサリ社会では、ひとびとを差異で結びつける年齢階梯・「クラン」などが重要なものではなく、均質的なひとびとによる結びつきである「イニチャ」・「インガオン」・「イニャブラ」などの人間関係が重要なものになってきていることを明らかにした。

第5章では、オルクタ、オディニール、オガンゴラン、ビイチャなどの仮面とバサリ語においては仮面とは異なるものとして分類され、フランス語話者によって「あまのじゃく」と呼ばれるアホレの特徴を記述し、バサリ社会における仮面とアホレの役割を検討した。

本章の記述を行うことで、まず、言語的には異なるものとして分類されている仮面とアホレはバサリ社会の中で同じような役割を担っていることを確認した。次に、バサリ社会の仮面とアホレの役割として、

- 1) 仮面は、祭りや農作業の際に、うたい踊ることで、ひとびとを楽しませる役割を担っていること
- 2) 仮面は規則の布告・実行・維持にかかわる役割を付与されていること

- 3) 仮面の及びアホレは年齢階梯制度と密接に結びついていること
- 4) 仮面とアホレは、普段とは異なる人間関係を生み出し、人間関係を多重化する機能を持っていること

の4点を指摘した。

第6章では、男が仮面になることが可能になるための手続きの中では、男とオルクタ・オディニールなどの仮面やアホレとの関係がどのようなものとして語られているのかを検討した。

バサリ社会では、少年が大人になるための手続きの一環として行われる祭りの2日目、エグブと呼ばれる場所でカメレオンの肉片の入った飲みものを飲むことで、以降仮面やアホレになることが可能となる。この状態は、「わたしはアホレと共にいる *g axore eme*」、「あなたたちはアホレと共にいる *g axore ii kun*」または「おまえはアホレを獲得した *ka syoto kujyo axore*」などと表現される。これらの表現は、全てアホレに関わるものであるが、オルクタやオディニールなどの仮面に関しても同じことだと説明される。また、この「共にいる」あるいは「獲得した」アホレや仮面になることは、大人になるための手続きの一過程として、普段とは異なることばで話し、普段とは異なる振る舞いをするを義務付けられている少年（「オガトレへ」と呼ばれている）と同じく、「異なるヌングになる」、「同じヌングではなくなる」などの表現で言いとられている。さらに、オルクタ、オディニールなどの仮面とアホレは、オガトレへと同じく「カメンレオンを飲んだもの」という名称で一括されている。これらの事実から、バサリ社会の仮面は、アホレやオガトレへと連続したものとして把握されていることが確認できる。

第7章では、仮面とアホレの差異を強調する2つの語り口を記述した。

仮面は「ビール」と呼ばれることで、アホレとは異なるものとして整理される。また、実際になされている言語行為をみればアホレやオガトレへの名前に纏わる慣行と連続したものであるのにもかかわらず、「誰々が仮面衣装を身につけている」、「仮面衣装を身につけているのはじつは村の男である」という周知の事実が、秘匿すべき「内容」を伴った「秘密」であると語られることで、オルクタ、オディニールはアホレとは異なるものとして整理されている。

第6章と第7章から、バサリ社会には、仮面をアホレとのつながりのもとに語る語り口とアホレとの差異を強調する語り口の2つの語り口があることが明らかになった。しかし、現在では後者の語り口が強調される機会が多く、さらに、フランス語文献やフランス語を話すことのできるバサリによって、仮面とは、仮面自体とは異なる「精霊」を表象したものであることを前提とした語りになされるようになる。

第8章では、なぜ現在このような語り口が多く見られるのかを、仮面に関する語り口とバサリ社会と外部社会の変化に伴うフランス語によるコミュニケーションの増大との関連を検討することで考察した。

バサリ社会と外部社会の関係が変化する中で、バサリ社会において、フランス語を話すことのできるものの数が増えていく。また、外部からやってくるものとコミュニケーションをとる必要から、フランス語によるコミュニケーションが重要なものとなっていく。このような中、ひとび

とが仮面についてフランス語で語る状況が生じてくる。バサリ語ではなく、フランス語で語られることによって、バサリ社会の仮面はこれまでとは異なつたかたちで問題とされる。フランス語での問いかけに、バサリのフランス語話者は回答することを選択したならば、それまで問題とされなかつたかたちで仮面を語り直すことになる。

つまり、仮面を「森の精霊」と語る語り口は、決してバサリ社会のコスモロジーに関する固定的かつ静態的な言明などではなく、バサリ社会と外部社会との関係が変化し、フランス語でのコミュニケーションが重要なものになってくる中で強調されるようになった、「歴史的」な語り口であると解釈することが可能となる。

成果

バサリ社会に関する報告は、少なくとも日本においては今までまとまつたかたちで成されたことはない。このため、本論の記述を行うことで、西アフリカをフィールドとする人類学および言語学に新たな知見を付与することができた。また、バサリ社会の仮面に焦点を当てる中で、外部と内部の関係を、どちらかに焦点を把握するという従来の認識・記述法に対し、外部・内部どちらかに焦点を当てるのではなく、外部と内部が絡まりあう中で起きている変化がありえることを1つの具体的な事例をもとに示すことができた。さらに、一般的に、ある社会のコスモロジーに関わるものとして静態的に把握される傾向にある仮面の「存在論」は、決して静態的なものなどではなく、ある特定のコミュニケーションの中で、歴史的に産出されたものでありうることを示すことができた。